

「ぼくらの七日間戦争」

この本は、中学一年生のとあるクラスの男子生徒達が、廃工場に立てこもり、それぞれの得意なことを活かして一致団結して「大人」と戦う話です。

大した作戦もなく立てこもるのではなく、しっかりと作戦をたて、互いに知恵をしばり「大人」と戦うので読んでいてとてもわくわくする本です。

ぜひ読んでみてください。

中・二年 A

「精霊の守り人」

短槍使いバルサは、青弓川に流された新ヨゴ皇国の、第二皇子チャグムを救う。彼はその身にこの世と重なって存在する異世界の水の精霊の卵を宿していた。彼の母はバルサに彼を連れて、逃げるように依頼する。新ヨゴの建国伝説では初代皇帝が水妖を退治したとされ、水妖に宿られた彼を、皇国の威信を守るため父帝が秘密裏に殺そうとしているのだ。同時に彼は卵を食らう異世界の怪物ラルンガにも命を狙われる。彼を連れ宮から脱出したバルサは、卵が彼の体を離れる夏至まで、幼馴染の呪術師タンダやその師匠トロガイと共にチャグムと暮らし始め、彼の命を守る。

「獣の奏者」の作者、上橋菜穂子の「精霊の守り人」シリーズ第一作。

高・一年 B

「麒麟」

この本は、天才精子バンクで生まれた天才数学者の遺伝子を受け継ぐ兄弟の話です。兄は容姿に優れなかったため「パーフェクトベイビー」を望む母親の期待を弟の麒麟は一身に背負っていた。しかし背中に怪しいシミが浮かんだ時から成長が停止してしまった。「失敗作」の烙印を押された彼は母と兄から見捨てられてしまう。孤島に幽閉されても家族の絆を信じ続ける麒麟に運命が残酷に立ちはだかる。

著者は元々ホラー作家であり若者の圧倒的な支持を受けています。しかし、本作は今までにない特殊な感動を呼び起し、このような異例なことを思いつくので僕はこの著者を好きになりました。

中・二年 C

「真夜中のパン屋さん」

真夜中にしか開店しないパン屋さんに訪れる個性豊かな客とそこの店員が繰り広げるドラマ化もされたハートフル？なヒューマンストーリーです。

しかもただほっこりするだけではなく、ミステリー的要素も含まれていたりするのでソフトなミステリー小説を読みたい人におススメです。

余談ですが、この本の登場人物の一人である柳弦基が物凄くカッコイイです。

高・二年 D

「余命一年のスタリオン」

「スタリオンボーイ」としてデビューして仕事もプライベートも絶好調の2枚目俳優である小早川当馬。彼は30代という若さで進行性の早い肺がんにかかり医者から余命一年と宣告される。この話は残された一年で彼の代表作と呼べる映画をとる話です。

彼はどんな映画を撮ってどんな最期を迎えるのでしょうか。彼の一生懸命に生きる姿に感動します。

是非読んでみてください。

中・三年 E

「やはり俺の青春ラブコメがまちがっている」

この作品は、どの世代時に読むか、読者自身がそのとき身を置いている環境などで受ける印象が違い、変化していくのだろうと思います。ずっとぼっちだったひと、ぼっち時代を経て今はリア充のひと、リア充だったけど今はぼっちのひと、ぼっちの時代などなく常にリア充のひと、いろいろな人がいると思います。この作品は、他作品ではあまり見られないぼっち視点で書かれています。本を読むのが嫌いという人も読んでみるとすらすらと話が入ってきてさまざまな感想をもつと思います。また、自分を取り巻く環境や自身の心境の変化があったなと感じられた後などに、もう一度この作品を手にとって読み返してみたいです。おそらくその都度、以前とはどこかが、何かが違った感想をきっと持たれることと思います。

高・一年 F